

松本清張記念館

◆館報◆
2017.8
第55号

何とかしなければ—
今のうちにあの男から逃がれなければ、
取返しのつかないことになる。

けものみち

松本清張

『けものみち』昭和39年(1964)年

「けものみち」は「週刊新潮」に、
昭和37(1962)年1月～昭和38(1963)年12月に連載され、
昭和39(1964)年に新潮社にて刊行された。

現在入手できる本：『けものみち』新潮文庫

目次

松本清張研究会 第36回研究発表会	2
平成29年度前期特別企画展	
「清張と鉄道」	
20周年企画あふれる想いを	
清張オマージュ作品募集	
展示品紹介	
点描 作品の舞台を訪ねて	
イベント報告	
友の会活動報告	
トピックス	
8 7 7 6 6 5 5 4	

作品紹介

成沢民子は、脳軟化症で身体が不自由な夫を養うために、旅館「芳仙閣」で働いている。民子は週に一度だけ自宅に帰るのだが、夫は民子のいない日々の間に猜疑心を募らせ、民子が帰宅するたびに容赦なく責めたてた。民子は夫に嫌気がさし、「この生活から抜け出すことを考えていた。

そん

なある日、ニュー・ローヤル・ホテルの支配人小滝が客として訪れ、民子に今的生活から抜け出しあつと上の生活が出来るという話を持ちかける。そのためには、身軽になることが最低限の条件だと言われた民子は、小滝の話に乗る覚悟をして自宅に火を放ち、夫の殺害をはかる。

民子は、小滝の勧めるままに、政財界の大物である鬼頭の愛人となる。以前とはくらべものにならないほど贅沢だが、自由のない生活に身をおく民子の前に、夫の死に疑問をもつ刑事久垣が現れる。久垣は独自の捜査で民子が夫を殺害したと確信をもち、民子の弱みを握つて誘惑しようとするが、些細な理由により警察を辞めさせられてしまう。女中の死など鬼頭の周辺には不審な事件が多い。自分の免職の背後にも鬼頭の影を感じた久垣はさらに調べ続け、新聞社あてに告発の手紙を書き鬼頭の犯罪を暴こうとする。しかし手紙は新聞社から鬼頭の手に渡り、久垣もまた闇に葬られてしまう。

鬼頭の保護で成り立つてゐる生活を、確実なものにしたい民子は、未来への約束を取り付けようとするのだが……。

突然の鬼頭の死により、世の中の流れが変わつて、民子の身にも危険が迫る。幸せになるために道を踏み外した民子と、民子をとりまく男たちの日常の中に潜む闇、そして社会の機構そのものの悪を描いた作である。

(檜垣一美)

松本清張研究会 第36回研究発表会

平成29年6月3日(土)
午後2時 東京女子大学

純文学論争と松本清張

講演 横原 修

広島大学名誉教授



純文学論争とは

「純文学論争」とは、昭和三六年から翌年にかけて行われた、純文学の存在意義をめぐる論争です。日本の近代文学史上、論争は数多くありますが、中でも大規模なものでした。松本清張にも関連する文章や発言がありますが、どちらかといつと当事者ではなく、論議の中でしばしば言及の対象となつた人でした。

今日はこの論争を通して清張が当時どう見られていたか、さらにそれらの見方にこれから見方になることはないか、などを見ていきたいと思います。

論争のはじまり

はじめに全体を要約してお示ししたいのですが、非常に入り組んでいて困るので、まさしく中村光夫が論争のさなかに指摘したように、どの作家も批評家もめいめいの頭の中にある純文学について議論しており、肝腎の「純文学」の意味内容がそれぞれの人によつて違い、激しいわりに具体的な論点のわかりにくいものでした。発端は平野謙の「群像」十五周年に寄せて〔朝日新聞〕昭和36年9月13日)などだと言わ

ています。かねてから平野は純文学は変質し堕落

していると述べてきましたが、「群像」十五周年を寿ぐ趣旨で依頼されたこの文章でも、「群像」が守ってきたような純文学というのをもうダメなのではないか」ということを書くのです。

それを受けて伊藤整は、「純文学は存在し得るか」(「群像」昭和36年11月号)で、プロレタリア文学と私小説という二つの純文学の理想像が、「松本清張と水上勉との二人(略)によって、あつさりと引き継がれてしまった」と述べ、問題は広がります。

磯貝英夫は後年、論争を整理して見取り図を示し、論争に参加した人を列記していますが、それによれば、大岡昇平、高見順、瀬沼茂樹、山本健吉をはじめとする論争参加者は、すべて純文学の作家・評論家でした。つまり、純文学とは無関係の外部的存在だと思つてゐた清張や水上勉に、純文学作家・評論家が、具体的な脅威を感じたことがこの論争の前提にあるわけです。この論争には本質的な文学の問題はないという三島由紀夫は「推理小説が売れなくなつたといふだけのこと」と、だと茶化していますが、たしかにそういう一面もなくはないと思います。

平野謙と伊藤整の主張

平野はまず純文学の概念について述べ、大正時代、菊池寛らがエンターテインメントの作品を書きはじめ、白井喬一らによつて大衆文学というジャンルが自覚された時、それに対応する形で純文学という概念ができるが、それは私小説を中心とするものだったとします。つまり私小説を中心的に純文学といつて、純文学を定着したんだとします。さらに、昭和一〇年に横光利が大衆文学と純文学とを兼ね備えるものこそ純粹小説だと論じたのは、戦後の中间小説の繁栄を予兆するものだったと。そして純文学はもう崩壊の過程にあり、「群像」の目標自体が揺らいでいると述べたのです。

伊藤は資本主義の社会悪をえぐるよくな、平原謙は當時一般に「小説神髄」で、小説は當時一般に

品を、プロレタリア文学と関わりのない松本清張があつたり実現してしまったと述べます。さらに政治の非情性といった現代的テーマすらまとめて扱えない純文学は大衆文学に圧倒されると、大胆な発言をしました。

大久保房男の反撃

ここでひとつ触れたのが、当時の「群像」編集長大久保房男です。大久保は平野の論に激怒しました。勝手に純文学イコール私小説と規定されたうえ、自分たちがもう死んでしまったものを擁護しているように言われてはだまらない、平野たちの「近代文学」派が推進してきた戦後派文学を「群像」は尊重してきたのに激昂し、「純文学変質説」を覺悟を決めたのです。

まず大久保は、「群像」の考へる純文学は平野の規定とは別物だということを示すと、座談会を企画し、自分の尊重する作家を純文学論議の中に位置づけようと試みます。そこで名前が挙がるのが、当時活躍していた、三島由紀夫、野間宏、椎名麟三、武田泰淳、安部公房、大江健三郎らです。たしかに皆純文学作家ではありますが誰も私小説の作家ではない。この当時、平野が指摘するような文壇の主流にいる私小説作家とはいひ難い誰だろうかという疑問は感じますね。

そもそも純文学とは何か

さらに大久保は、平野に近い作家や評論家に平野謙批判を書いてもらおうと依頼します。最初埴谷雄高にはうやむやにされてしまうのですが、高見順や瀬沼茂樹は、坪内逍遙や北村透谷の反撃から論争ははじまります。

高見順や瀬沼茂樹は、坪内逍遙や北村透谷の時代から純文学は存在していたと言いつつ、平野の所説の独断性を攻撃します。たしかに彼らは、彼らの言ふことも彼らの言うことも、彼らの言うことも

とされ、知識人のなすべきものとは見られていないかったのに対して、そうではなく、芸術の一つであつて、立派な存在意義を有するものだと位置づけています。以前研究者の亀井秀雄が逍遙の使う「美術」「芸術」という言葉に「ファンアート」というふりがなを振つて、私はなるほどと思いました。大衆芸術、応用芸術とは違う、純粋芸術ということですね。たしかに「芸術」としての文学(小説)という考え方ですが、たしかに「芸術」とは何かだと言えそうです。ただし、その「芸術」とは何かという問いに対する、具体的な内容を持つた答えは、「小説神髄」にはないよう思います。

こののち大正時代には、久米正雄が芸術とは人生の再現だ、だから私小説がいいんだなどと言います。多分に独断的な発言ですが、彼流の定義として、形式論理的には誤りではないと思います。この久米も加わった論争が私小説論争で、それを通じて私小説という概念が定着します。面白いのは、この時期が、平野謙の言う純文学概念の定立時期とほぼ重なるということです。

平野謙の希求

こうした文学史的事実を踏まえて平野謙も私小説イコール純文学という言い方をしたんですね。私小説が主流にあり、それにあきたらず、小説の現実性を取り戻そうとした、たとえば菊池寛の「文芸作品の内容的価値」や廣津和郎の散文芸術の位置などの新しい動きも次々起こりましたが、どれもうまく進まなかつたという形で、彼は戦前の文学史を描きます。

平野が求めたのは、小説のアクリティアリティ(現実性、時事性)の重視です。戦前、アクリティアリティを求めた最大の運動はプロレタリア文学運動だったと彼は位置づけますが、その挫折を踏まえて、芸術性とアクリティアリティ対立し矛盾するかに見えるこの両者を、統合し発展させる——彼の好みで用いる用語で「言えばアウフヘーベン(止揚)」する——新しい文学を考えるべきだという論理に立つて、現在の純文学はダメだと彼は言つたのです。そんな平野の希求するものを体现するかに見えたのが松本清張でした。

では清張自身は純文学をどう考えていたのでしょうか。清張は純文学をさかんに批判しますが、それは平野流の狭義の純文学=私小説の批判です。清張は、純文学の大衆文学だのいう

区別は絶対的なものではなく、「文学とは人生の何かが書かれていなければならない」ものだとも述べています。人間像が描き切れていれば、推理小説であっても立派な文学であり、芸術だというのです。なるほどと思いますが、「人間像が描き切れればいい」とは、その頃の純文学評価の慣用語であつたことにも気付きます。逍遙の論以来の、ファンアートつまり芸術としての文学というテーマを前提にして、その中身を久米流の「人生」で満たしています。

平野と清張の対談
「私小説と本格小説」

「群像」は平野謙と清張の対談を企画しました（昭和37年6月号）。そこで平野は、清張と「日本の黒い霧」は「贋の緒が繋がっている」と評します。作者と作品には内面的なつながりがあり、単なるノンフィクションではなく立派な文学だと言います。現代文学の行き詰まりを危惧する平野は、彼の理論的な要請に基づいて、こうした清張の手法から、本格的な社会小説ができる道筋を思い描いています。

このように社会小説の可能性を清張に見出す方で、平野は「或る『小倉日記』伝はいかにも松本清張といつ刻印をちゃんと押した小説」であり、好きな作品だとも言っています。初期の一連の作品の多くには実在のモデルがありますが、そこには清張の自分が投影されており、いわば「変形私小説」だと言います。それらは、白他を客観視する無私の眼も備えたすぐれた作品だと評価し、あいつた作品を書き継がなかつたのは惜しいと述べます。これを読むと、結局のところ平野が心から評価する清張の作品は、こうした私小説風の作品なのかもという気もします。

平野が清張の初期作品を評価したのに對し、大岡は「松本にはこういうほんとの意味の人生観照はないと思う」とし、「日本の黒い霧」についても、予断をもつてそれに合うデータを集めただけではないかと全否定に近いような言い方をします。

これに清張はみごとに反論します。「黒い霧」は帰納的に考えたものであり、「事実はあるが真実はない」と批判するからには大岡は真実を知っているければならぬが、それは本當かと。たしかに大岡の批評は單なる印象批評で、確かに裏付けはありませんから、清張の反論は的確ですぐれた論争術であったと申せましょう。實際、大岡からの反論は出て来ません。

しかし、純文学の側の既得権益を脅かす存在である松本清張に対する悪意や差別意識に満ちた言いがかりに見える大岡の論には、本当の意味の批評は含まれていないのでしょうか。「断碑」における「人生観照」の有無について、平野と大岡は対照的な見方を示しますが、これはどちらの評価が正しいのでしょうか。私は、第八回のこの研究会で、春成秀爾氏が行つた講演の内容を読んでなるほどと思ったのですが、たしかに清張の小説の取材方法の客觀性については参考する余地があります。また、そうした事実に基づいた作品自体の再検討も必要だと思います。大岡はそのほかにも清張の文学の方法的問題を指摘していますが、それらがもっぱら誹謗中傷として清張に受け止められたようではあるのは残念です。もし大岡の批判に清張が蓋をしてしまわなかつたら、これは清張にとっても有益な議論になり得たかもしれません。

清張と文壇

松本清張全集第三四巻（文藝春秋）の解説で鶴見俊輔は、個人と社会との関連を推理小説の中

大岡昇平「松本清張批判」

最後に大岡昇平の「松本清張批判」を取り上げます。表題のせいかあまり純文学論争のまどめでは取り上げられませんが、半分は平野謙や伊藤整への反論ですし、清張批判も、それを通して彼らの清張評価を覆そうという意図によって行われています。

平野が清張の初期作品を評価したのに對し、大岡は「松本にはこういうほんとの意味の人生観照はないと思う」とし、「日本の黒い霧」についても、予断をもつてそれに合うデータを集めただけではないかと全否定に近いような言い方をします。

これ後、中央公論社の全集「日本の文学」に清張が収録されないという事件が起きます。編者一人であつた三島由紀夫が強硬に反対し、松本清張集という一巻が没になる。文壇が清張の存在を

大岡の論は陰湿な論難のように見えますが、これは公開の場で行われ、清張にも反論の機会がありました。この後、中央公論社の全集「日本の文学」に清張が収録されないという事件が起きました。編者一人であつた三島由紀夫が強硬に反対し、松本清張集という一巻が没になる。文壇が清張の存在を

で十分に展開するのは困難で、それを意識した清張は、記録や、現代史、古代史論へと向かつたと述べています。清張の社会派推理小説は現代の政治悪を十分に描き出せてはいないという大岡の批判は、遠からず清張自身も突き当たる問題だったのではないかでしょうか。

推理小説だから下に見られるが、ちゃんとしたものを書いている、だから文壇の中にちゃんとした椅子を与えてほしい、純文学だと偉そうにしているが私小説つづまらないんじゃないかと。つまり、自分も正当に評価されたいと申し立てていたのではないかという気がします。

実際に、そうした意識を払拭してこそ、清張独自の世界が展開されるのではないかと、私は考えるのでですが……。

シヤツアウトしたこの出来事のほうが問題ははるかに大きいです。清張自身も激怒します。

この全集事件以前つまり「純文学論争」の頃の清張は、純文学や文壇を全否定まではしてはいないのではないでしょうか。推理小説だから下に見られるが、ちゃんとしたものを書いている、だから文壇の中にちゃんとした椅子を与えてほしい、純文学だと偉そうにしているが私小説つづまらないんじゃないかと。つまり、自分も正当に評価されたいと申し立てていたのではないかという気がします。

松本清張と森浩一

研究発表

講師 深萱 真穂
フリーライター



「定説への挑戦と古代史ブームの牽引」

要旨

私は一九八九年、新聞記者として森浩一さんと出会いました。二〇一〇年に早期退職し、森さんが三年に亡くなるまで連載などをお手伝いしました。折々に清張さんとの交流について伺いました。

八九年の福岡市での国際シンポジウム「古代日本」の国際化が、二人が会った最後です。鋭さを欠く清張さんに森さんは失望しますが、当時の清張さんと同年配になると評価が変わります。最期まで創作に打ち込んだ清張さんの生きざまは、天皇陵に関する貴重な史料にも劣らない、森さんへ贈り物でした。

森さんは邪馬台国大和説の物証とされた三角縁神獣鏡について、国産説を六〇年代から提唱します。魏から卑弥呼に下賜された鏡だと唱えます。京都大学の小林行雄らに果敢に挑みました

が、当時は高校教師で、無視に近い扱いを受けましたが、以後も清張さんから手紙が数多く届き、親交が続きます。清張さんが受け止めた直言こそ、森さんからの一番の贈り物かもしれません。

清張さんはこの国産説に関心を持ち、七年に

清張と鉄道

—時代を見つめて—

★ 小倉発 1万3500キロ

期 間
平成29年 8月1日(火)～
10月31日(火)



1 清張・鉄道年表

明治以前より始まる日本の鉄道史を、明治生まれの清張の年表と並べて対比。

2 清張鉄道 1万3500キロ

清張作品の登場人物たちが乗車した総計1万3500キロに及ぶ国内路線の全貌や変遷について、路線図を中心に概観。



▲ 作中乗車路線

3 作品を彩る列車たち

清張作品には実在の列車が登場することもある。作品を彩った様々な列車を、清張の文章とともに紹介する。



「あさかぜ」
京都鉄道博物館提供

4 消えた線路

かつては隆盛を極めたが、もう二度と列車が走ることは無いレール。九州北部の廃線のうち、清張自身や作品と関わりがある路線を中心的に、その現役当時や現状をたどる。



国鉄幸袋線跡▶

5 人気作品鉄道今昔

アンケートで常に人気の3作品について、作品当時と現在における所要時間や経路の違いを比較する。

対象作品▶



6 あの頃の車窓

多くの清張作品が執筆され、あるいはその舞台となった昭和30～40年代の列車内を再現。車窓に過ぎゆく風景と合わせて擬似乗車体験を満喫。



懐かしの車両設備▶



あふれる想いを… ③

今回は、清張さんと親交が深く、記念館建設 당시に主に展示・映像の関係でご尽力いただきました、元株電通エンタテイメント事業局局長・エグゼクティブプロデューサーの勝田祥三さんに、清張さんへのあふれる想いをお伺いしてきました。

— 勝田さんは記念館の建設にあたって、主に展示関係のスタッフのまとめ役として活躍されたとお聞きしていますが、当時一番苦労したのはどんなことでしたか



NPO PLANT A TREE
PLANT LOVE 理事長

勝田 祥三 氏

勝田：当時は、藤井さん（現名誉館長）を信頼して、全面的に協力するというスタンスで仕事をしていました。藤井さんの想いや北九州市さんの構想そのままに作るために、私の出来ることはなんでもしました。もともと清張先生をよく知っていたこともあって、今思い出しても苦労とかは特に感じなかったです。

— 生前の清張さんと親しかったのですか

勝田：そうですね。先生とは30年来のお付き合いでした。わたしの仲人をしていただいたし、父親が亡くなつてからは保証人にもなつてもらつたくらい親しかつたです。先生が取材旅行に行くときに同行させてもらったことも何度もありました。海外では「霧の会議」の取材、国内では北海道とか銀山とかですね。

— 清張さんはどんな方でしたか

勝田：先生は、取材のときなど、自分が納得するまで同じことでも、何度も聞く人でした。自分の意見や考えは常にしっかりと持つていて、人の話もしっかり理解するまで聞く。そうやって真実

に近づいて行く感じでした。それでいて、自分の考えが違つていて思えば、すぱっと修正するような柔軟性も持っていました。話に夢中になると、着物に煙草の灰が落ちても気にならないような感じでしたね。よく見ると、着物はそこらじゅう穴だらけです。先生は親しくなるととても可愛がつてくださる方で、週に2、3回は会つて、いっしょに食事に行って、いろいろな話をしていました。特に日本史の話なんかが多かったです。話のあいまに冗談もよく言われる方でした。

— 清張さんとの関係をひと言で言うと？

勝田：うーん、友人というのも違うし、親子でもないかな。師匠と生徒というか、門下生が師匠に導いてもらう感じです。先生とおつきあいさせてもらったことは本当にいい思い出で、当時から「この人のためならどんなことでもしよう」と思つせてくれる方でした。

— 最後に今後の松本清張記念館についてひと言お願いします

勝田：先生が亡くなつてもう25年経つとか。それでも今でもドラマができたり本が増刷されたりするのですから、本当にすごい人だったのだとあらためて思います。松本清張記念館は、先生の仕事や生き方を知ることができる場ですよね。今後は、今先生が生きていたら、この世の中をどう見るのかといったことも伝えていけたらいいですね。今この時代に松本清張が生きていたら、何にフォーカスするのか、何について書くのか。私はそれが知りたいです。きっと日本だけでなく、世界に眼を向けていただろうなと思いますけど。

勝田さんは、現在「PLANT A TREE PLANT LOVE」というNPOの活動をされていて、「ともいき」「ともうみ」「ともさち」そして「和」など日本の本質的な価値を訴求する「ジャパネスク運動」などをされています。清張さんが生きていた頃から、この構想の話をいっしょにされていたとか。「今、この活動について、先生のご意見をぜひ聞いてみたいですね」と笑つていらしたのがとても印象的でした。

NPO PTPL: <http://www.plantatree.gr.jp/> ともいき暦: <http://www.tomoiki.ptpl.or.jp/calendar/2017/> ジャパネスク: <http://japanesque.tokyo/>

清張オマージュ作品を教えてください！

松本清張記念館は平成30年で開館20周年を迎えます。これを記念して当館では「清張オマージュ展」（仮）を開催する予定です。

松本清張や、清張作品への愛を、文章や絵、漫画などの作品で表現したものを、できるだけ多く紹介したいと思っています。

ご存知の方は、是非とも情報を寄せください。**お待ちしています!!**

例えば……

この前読んだ小説に
清張が出てきたよ！



清張の本が出てくる
漫画があった！



著名人が、好きな作家に
清張の名前を挙げていた



応募・お問い合わせ先

〒803-0813 北九州市小倉北区城内2-3
松本清張記念館 オマージュ係

TEL 093-582-2761 FAX 093-562-2303

E-mail shi-seichou@city.kitakyushu.lg.jp

※当館の公式ウェブサイト、トップページから送信できます。

オマージュ:hommage(フランス語)とは ①尊敬。敬意。②賛辞。献辞『広辞苑』より

展示品紹介

『黒い画集「遭難」掲載誌』

清張の多岐に渡る創作活動を紹介するため、当館では作品をジャンル別に展示するコーナーがある。中でも「推理小説」は松本清張の一大ブームを巻き起こした代名詞的なジャンルだ。

連作『黒い画集』の第一作「遭難」が掲載された「週刊朝日」は、その推理小説コーナーに展示されている。清張ミステリーの代表作といえば、「点と線」「ゼロの焦点」「砂の器」など、長編小説を思い浮かべる人も多いだろう。しかし、忘れてはならないのが、この連作『黒い画集』なのである。

『黒い画集』は、昭和三三年（1958年）五月から三五年六月（1959年）九日まで「週刊朝日」に連載された、九つの中短編から成る連作集である。編集長・扇谷正造が「サマセット・モームの『コスモポリタン』」を読んで、短編の読切り連載という形式で清張に依頼することを思いついた。清張はこれを躊躇しながらも引き受けた。条件も一話につき連載五回まで可と緩和された。

連載直前の「作者の言葉」（注）では次のように述べている。



・黒い画集「遭難」掲載「週刊朝日」

思っている。新しい方向がそれから得られたら、幸いである。苦しい仕事に違いないが、それだけに私は野心に燃えている。

「遭難」は、このような意気込みで書き始められた。本作には、当時の常識を覆す設定がいろいろと張り巡らされている。折りしも井上靖の「氷壁」によって登山ブームに沸き、岳人に悪人はいない」という公式的な言説があつたのに對し、山が二種の密室であり「人間の作為的な遭難」もあり得ると考えたのである。

実は清張執筆前に鹿島槍の途中まで登つて、あとは空想で書いたという。その際同行したのが「鹿島槍研究」の著者・吉田二郎氏で、同書による知識が「遭難」執筆に生かされている。

（学芸員 柳原暁子）

（注）「週刊朝日」昭和三三年九月二八日掲載

作品の舞台を訪ねて

「或る『小倉日記』伝」③—生きた証を残して



従来の推理小説は、そろそろ新しい方向に移行していくのではなく、かと私は思っている。ボウに始まり、ドイルが創設した探偵小説の型は、以後さまざま発展を遂げたけれど、ある点では隘路に迷い込み、自らを狭い場所に屈めた感じがないでもない。私は自分なりの考え方で、これを広い自由などへと移したい。

（略）何本かの試験管を前にならべ、これから液を充たそうと

東某という妓楼の亭主は耕作の身体を意地悪く見ただけで、鷗外に關係したことは何も知つては、なかった。「そんなことを調べて何になります？」と傍らのふじに言ひすてただけだった。そんなことを調べて何になる——彼がふと吐いたこの言葉は耕作の心の深部に突き刺さって残つた。實際、こんなことに意義があるのだろうか。空しいことに自分だけが氣負つたうのはないか、と疑われてきた。（中略）このような绝望感は、以後ときどき、つぜんに起つて、耕作が髪の毛をむしるほどに苦しめた。

（文藝春秋『松本清張全集35』「或る『小倉日記』伝」より）

せつかく見つけた生きがいに価値を見出せなくなるというのは、どんなにむなしいものだろうか。耕作にとっては、唯一と言つていい情熱の対象であつたことを思えば、その苦悩の大きさはばかりしない。そんな苦悩を抱えた耕作は、白川医院看護婦の山田てる子との出会いがある。てる子は、伯父が広寿山にて鷗外が遊びに來ていたと話す。そして自分が案内をすると申し出で、暖かい初冬の日に、一緒に広寿山に登るのだ。

広寿山福聚寺は、今では住宅街の一角にあり、登るというイメージはな

耕作の死後、ふじは耕作の遺骨と風呂敷包の草稿を持ち、遠い親戚のもとへ身を寄せる。鷗外が「冬の木立」と評した空模様の日であった。

本物の「小倉日記」が出てきて、耕作が生涯をかけて調査を行ったことは決して無駄ではなかつたと私は思う。母に、自分の生きた証をしつかりと残すことが出来たのだから。

（檜垣一美）

ふじが同行するようになつても、なかなか耕作の調査は思うようには進まなかつた。森鷗外が小倉にいた頃を知る人々がまだ生存してはいるものの、みなと一緒に年齢を重ねていて、なかなか当時のことを覚えてはいなかつた。そんななか、鷗外の家主の孫だったという東に会う。

はじめてふじ以外の女性との優しい気持ちのやれども、ふじは、いかにもこの冬の一日が、耕作の短い人生のなかでは、もっとも優しく暖かい一日だったのかもしれない。そしてここからまた少しずつ道が開けていく。てる子の伯父から堺町の東禪寺に鷗外が通つてることを聞き、東禪寺の僧から當時寄進した人たちの名が載つた魚板を見せてもらう。その中には鷗外の名もあつた。そこにある名前を訪ねていく中で、鷗外と懇意にしていたという麻生作男の話を聞く機会にも恵まれるのだ。

しかし資料が増えていく一方で、耕作の体調はどうか。はじめに、ふじ以外の女性との優しい気持ちのやれども、ふじは、いかにもこの冬の一日が、耕作の短い人生のなかでは、もっとも優しく暖かい一日だったのかもしれない。そしてここからまた少しずつ道が開けていく。てる子の伯父から堺町の東禪寺に鷗外が通つてることを聞き、東禪寺の僧から當時寄進した人たちの名が載つた魚板を見せてもらう。その中には鷗外の名もあつた。そこにある名前を訪ねていく中で、鷗外と懇意にしていたという麻生作男の話を聞く機会にも恵まれるのだ。

い。けれどもその山門から振り返れば、住宅の合間にからかすかにではあるが小倉の町をのぞむことができる。今ではビルが建ち並び、昔の風景とは全然違うのだろうけれど、やはり爽快感がある。この場所に立つて町並みを見下ろせば心の中に感じていた苦悩がちっぽけなものに感じられたのではないだろうか。

ははじめてふじ以外の女性との優しい気持ちのやれども、ふじは、いかにもこの冬の一日が、耕作の短い人生のなかでは、もっとも優しく暖かい一日だったのかもしれない。そしてここからまた少しずつ道が開けていく。てる子の伯父から堺町の東禪寺に鷗外が通つてることを聞き、東禪寺の僧から當時寄進した人たちの名が載つた魚板を見せてもらう。その中には鷗外の名もあつた。そこにある名前を訪ねていく中で、鷗外と懇意にしていたという麻生作男の話を聞く機会にも恵まれるのだ。

しかし資料が増えていく一方で、耕作の体調はどうか。はじめに、ふじ以外の女性との優しい気持ちのやれども、ふじは、いかにもこの冬の一日が、耕作の短い人生のなかでは、もっとも優しく暖かい一日だったのかもしれない。そしてここからまた少しずつ道が開けていく。てる子の伯父から堺町の東禪寺に鷗外が通つてることを聞き、東禪寺の僧から當時寄進した人たちの名が載つた魚板を見せてもらう。その中には鷗外の名もあつた。そこにある名前を訪ねていく中で、鷗外と懇意にしていたという麻生作男の話を聞く機会にも恵まれるのだ。

い。けれどもその山門から振り返れば、住宅の合間にからかすかにではあるが小倉の町をのぞむことができる。今ではビルが建ち並び、昔の風景とは全然違うのだろうけれど、やはり爽快感がある。この場所に立つて町並みを見下ろせば心の中に感じていた苦悩がちっぽけなものに感じられたのではないだろうか。

VRイベントを行いました

3月24日～26日と5月4日、6日に「VRで見よう!清張の書斎」というイベントを行いました。360度カメラで撮った記念館再現家屋の中を、VR(仮想現実)技術を使って、見るというイベントで、VRゴーグルをつけたとたん、まるで再現家屋の中に自分が立っているような視点になりその感覚に皆さん一緒に驚かれていました。



「楽しかった」「めったにできない体験だった」というコメントを、たくさんいただいたイベントでした。

ドラマ上映会を行いました

5月12日～14日、19日～21日の6日間、「ドラマ上映会」を記念館の企画展示室で行いました。

過去にNHKから寄贈されたドラマ14作品のうち「虚飾の花園」などの3作品を上映し、延べ395名の方が参加してくださいました。どれも松本清張特別出演のドラマで、在りし日の姿にみなさん喜んでいらっしゃいました。



講演を行ってきました

29年度も、松本清張の魅力をより多くの皆様にお届けするために、清張の人物や作品、故郷への想いなどをテーマに講座、講演を行っています。

日付	主催者・会場等
4/25、7/19	記念館・はじめて聞く清張講座
4/26	藤松市民センター
4/28、5/10	田野浦市民センター
5/9、5/23	田原市民センター
6/16	西小倉市民センター
6/22	足原市民センター
6/24、7/22	京町文学サロン
9/13(予定)	白野江市民センター
11/8、11/15(予定)	貴船市民センター

友の会 活動報告

● 朗読劇「疑惑」

平成29年5月27日(土)19時～ 参加者154名
松本清張記念館・屋外特設スタンド

劇団前進座による朗読劇は、今年で14回目を迎え、春の恒例事業となっています。今年は、屋外で過去最多となる154名の参加がありました。今回の上演作品は、何度も映像化され、舞台でも公演されている「疑惑」です。自動車転落事故が、保険金殺人ではなかったかという「疑惑」を中心に物語が進みます。当日は小倉城の石垣をバックに、照明、音響、朗読が一体となり、作品世界を作りました。出演者の皆さんには、それぞれ複数の役を、声だけで巧みに演じ分け、参加者からは、「朗読の真剣勝負、堪能させていただきました。」「初めてでしたが、素晴らしかった。」「毎年楽しみにしています。」等の感想が寄せられました。



● 清張サロン

清張サロンでは、清張作品や清張に関する話題をテーマとした講演や参加者との意見交換・交流を行っています。3月に開催した第4回清張サロンでは、「火の路へ」のオリジナル映像も流しながら、清張の古代史研究へのアプローチについて話をしました。

第4回 平成29年3月24日(金)
14時～16時
●場 所：松本清張記念館・会議室
●講 師：下澤聰(記念館・企画係主任)
●テーマ：「清張と古代史・考古学」

● 文学散歩

テーマ：関東文学散歩～作品と創作の舞台を訪ねて～

平成29年5月14日(日)～15(月) 参加者25名

1日目 横浜駅→観音崎→神奈川近代文学館

2日目 松本邸→善福寺川緑地→深大寺→国立天文台→禅林寺

今回の文学散歩では、松本清張邸の見学をメインに、観音崎、神奈川近代文学館や、清張作品にも数多く登場する深大寺等の武蔵野の面影を残すスポットを巡りました。最初の目的地の観音崎は、「球形の荒野」のラストシーンが印象的な場所です。また、神奈川近代文学館では、開催中の特別展「生誕150年 正岡子規展 一病牀六尺の宇宙」を観覧しました。松本邸では、邸内とお庭を見学し、松本家の皆様

から大変心温まるお心遣いをいただきました。また、善福寺川緑地、深大寺、国立天文台を訪ね、武蔵野の新緑を堪能しました。最後に訪れた禅林寺では、森鷗外と太宰治のお墓や、下山事件、松川事件と並ぶ「国鉄三大事件」の一つ、「三鷹事件」の遭難者慰靈塔を参りました。参加者の皆さんからは、「これを機に、また作品の理解を進めたい。」「松本邸が見られて、作者がどのような気持ちだったか、ちょっと感じ取れた。」といった声が寄せられました。



● 友の会会員 更新のお知らせと新規会員募集 ●

松本清張記念館友の会は8月1日～翌7月31日を1年度として、文学散歩や清張サロン、講演会、生誕祭、「友の会だより」の発行、記念館に関する情報提供など多彩な事業を展開しています。
年会費は3,000円です。皆様のご入会を心よりお待ちしています。

友の会入会のお申込は、
松本清張記念館友の会事務局まで
TEL.093-582-2761



平成29年度
中学生・高校生

読書感想文コンクール

清張作品の読書感想文を、中学生・高校生を対象に募集します。

若年層に、より多くの作品に親しんで欲しい、表現力を学び豊かな心を身に付けてもらいたいという願いから、このコンクールは始まりました。そして、これからを担う若者たちに、探求の人・松本清張の精神を伝えていくことができれば幸いです。

■ 応募対象 全国の中学生・高校生

■ 課題図書 中学生・高校生ともに下記から1作品

「砂の器」

(『砂の器』上、下 新潮文庫)

「遭難」

(『黒い画集』新潮文庫)

「左の腕」

(『佐渡流人行』新潮文庫、『無宿人別帳』文春文庫、
『遠くからの声』光文社文庫)

■ 応募方法

- 中学生、高校生ともに1200～2000字程度の読書感想文を書き、応募用紙に添えて提出してください。
- 手書き、ワープロどちらでも結構です。ただし全体の字数がわかるよう応募用紙に1行の字数×行数を記入してください。
- 原稿は自作で未発表のものに限ります。なお応募原稿はお返しいたしませんので、必要な人はコピーをおとりください。

■ 応募締切 平成29年9月30日(土) ※当日消印有効
昨年より1ヶ月早まります

■ 応募先 〒803-0813 北九州市小倉北区城内2番3号

松本清張記念館 読書感想文コンクール係

※応募用紙は記念館HPからダウンロードできます。

■ 選考 松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

■ 発表

最優秀賞、優秀賞の受賞者には、11月中旬頃、本人と学校に通知し後日表彰式を行います。なお、入選の結果は、当館発行の「館報」で発表します。その場合、著作権は松本清張記念館に帰属します。

■ 賞と商品 (受賞人数等変更の場合もあります。)

○最優秀賞(1人)

『モンブラン』万年筆「マイスター・シュテュックNo.149」

○優秀賞(中学の部…1人)(高校の部…1人) 文具など

○佳作(中学の部…3人)(高校の部…3人) 図書カード 他

※なお、最優秀賞は中学の部、高校の部で各1回ずつの受賞と限らせていただきます。最優秀賞受賞後の応募も歓迎します。すでに受賞した人からの応募作品が賞に該当する場合は〈特別賞〉として当館発行の「館報」掲載を予定しています。

●協力 モンブランジャパン



応募先 問い合わせ

〒803-0813 北九州市小倉北区城内2番3号 松本清張記念館 読書感想文コンクール係
TEL 093-582-2761 FAX 093-562-2303

●編集後記●

この館報が出る8月1日は、二十四節氣では、「大暑」、七十二候では「土潤溽暑」と、どちらも暑い季節という意味のようです。

清張が亡くなつて25回目の夏がやつきました。今年の開館記念講演会の講師は、福岡県出身の作家・赤川次郎氏で、講演のテーマは「ハッピーエンドの時代」です。内容は次回の館報でお届けします。

4ページでもご紹介していますが、8月1日より新しい企画展「清張と鉄道」を開催しております。清張ファン、鉄道ファンをはじめ多くのみなさまに楽しんでいただける内容となっております。皆様のご来館をお待ちしています。



編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813

北九州市小倉北区城内2番3号

TEL 093(582)2761

FAX 093(562)2303

<http://www.kid.ne.jp/seicho>

制作 (株)ハーティブレーン



イラスト:山藤 草二

- 開館時間 午前9:30～午後6:00(入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円)
小学生/200円(160円) ()は30人以上の団体
- アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分
小倉駅からはバスをご利用いただくと便利です(小倉城・松本清張記念館前下車)
車: 北九州都市高速、大手町ランプより5分

